

モーツァルティアン談話室：カノン『私ニトツテ読ムノガ苦手ナノハカノンナノカ』

野口秀夫

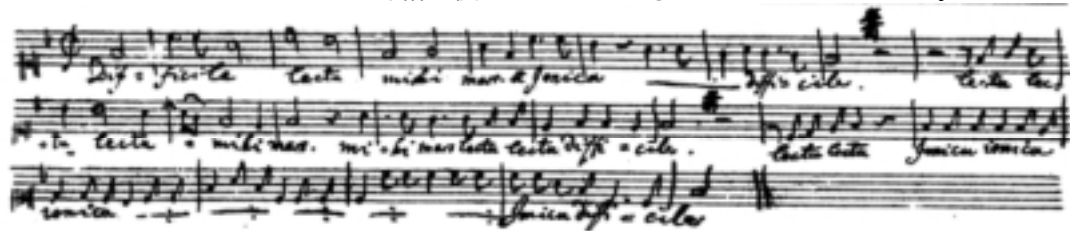
『手に余る、ガンコガンコは(三声用のカノン)』K.559

鳥代：前回に続いてモーツァルトが仲間と一緒に歌った、ひどくて下品な迷作だと言われているカノンを見ていきましょう。今回は犬輔さんと役割を交代するわ。では、教授、Difficile lectu mihi mars et jonicu K.559 からですね。どうぞ。

教授：まず、原詩はラテン語で書かれているから、その表面上の意味を知ることから始めなくてはならない。以下の通りだ。

Difficile lectu mihi mars et jonicu jonicu difficile, ... lectu lectu, jonicu jonicu ...jonicu difficile. 動詞を補足し、正規なラテン語にすれば、Difficile(副詞“苦勞して、容易でなく”) lectio(主格“朗読、読むこと”) mihi(奪格“私に”) est(動詞“である”) Mars(主格“戦争、軍神”) et(接続詞“そして”) Ionicus(主格“イオニアもの”)であり、全文は「私にとって読むのが苦手なのは戦記とイオニア詩、イオニア詩だ。イオニア詩イオニア詩...イオニア詩は読むのが苦手だ。」という意味だ。“怪しげなラテン語で書かれたカノン”という解説にときどき出会うが、なんとなんと立派なラテン語の文章だ。モーツァルトは est を省略して格言風に仕立てたんだね。ここでドイツ語の発音に似させるために(種を仕込むために)モーツァルトは lectio を lectu に変形し、それと脚韻を踏むために ionicus を jonicu に変形した(いくつかは語頭をドイツ語綴りに近い J にし Jonicu としてもいる)。これくらいの変形は許せるね。

なお、ionicus の与格 ionico (“イオニア詩を”)をモーツァルトが jonicu と書き間違えたのではないかとする意見がある。この説を採るならば lectu を動詞的に訳して『私には戦記やイオニア詩を読むのが難しい』とでもなるうか。この訳がほとんどの解説書に書いてあるところを見ると、この説を採る人がほとんどなのだが、それはありえない。与格(ionico)を正とするなら mars も与格の martis (“戦記を”)にしなればならず、モーツァルトが mars をそのまま与格に使っているとは考えられないからである。



犬輔：このカノンのエピソードは1824年になってはじめて伝えられているんですね<sup>注1</sup>。ずいぶん年数がたっているので正確さは保証できないんでしょうけど、「大変に優秀なミュンヘンのテノール歌手(実際はバリトン歌手)ヨーハン・ネポームク・パイエル(1800年没)は、発音に若干の問題があって、モーツァルトは、友人仲間の集まりで友人たちとしばしばそれをからかったものだった。ある夜のこうした集まりで、モーツァルトは、パイエルが歌うと発音がきわめて滑稽にならざるを得ないようなラテン語の詩行 Difficile lectu mihi mars をカノンに作曲することを思いついた」とあります。

鳥代：Peierl は Peyerl と綴るから Bayern のもじりかと思っていたけれど、実在の人だったんですね。バリトン歌手としてよりテノール歌手としての契約の方が有利だったのかしら。

犬輔：おそらくパイエルは t を d に発音し「トゥ」が「ドウ」となった。また促音化する傾向があり、「レク」が「レック」に、「ミヒマルス」が「ミツヒマルス」に、「ヨーニク」が「ヨーニック」になった。それぞれ leck, du, mich im Arsch(俺の尻を舐める)に聞こえるという具合。最後の「ヨーニク」は「とくにこの歌詞の後半の正確な意味は不明(イオニア音脚と関係があるのかもしれない)<sup>注2</sup>」と難しく解釈する向きもあったけど、1975年に属啓成氏が jonicu はドイツ語の Johanness に当たり、“An der Nase sieht des Mannes, die Grösse des Johannes(男の鼻を見れば、ヨーハンの大きさが分かる)”という諺を根拠に“男性自身”のことであると<sup>注3</sup>、皆がこの説に飛びついたんだそうですね。

教授：だが、私はこれには懐疑的だった。なぜなら、いつも言うように今日の常識すなわち諺・格言や慣用語がモーツァルト当時と同じかどうか証明されなければならないからだ。じっさいこの諺は一般には“Wie die Nase des Mannes so sein Johannes”と言われ、Google Books で調べると最も古い使用例が1911年なんだ。

犬輔：それで欧米の説は全く異なっているんですね。歌詞の後半の連呼部分「ヨーニックヨーニック...」から「ックヨーニッ」すなわち cunjoni が浮かび上がってくるとアーベルト(1919年)やヴィンターニッツ(1958年)<sup>注4</sup>が既に指摘していたんです。これは日本の文献では全く言及されてこず、欧米でもずっとこれが何を意味するのか説明されてこなかったん

ですが、やっと最近 Wikipedia で *cujoni* [クヨーニ] がイタリア語の *coglioni* [コッリョーニ] に聞こえると種明かしされたんです<sup>注5</sup> (ということは *jonico* にしておけばぴったりなのに、そうしないでラテン語の文法を大事にしたモーツァルトの厳密さには脱帽! )。

教授：おっと。そんな指摘や研究成果があったとは夢にも知らなんだ。日本に住んでいたからという言い訳は通用せんね。イタリア生まれの私の不明を恥じるのみだ。

鳥代：教授！*coglioni* ってイタリア語はどういう意味なんですか？

犬輔：教授！ネタバレしては駄目ですよ。

鳥代：意地悪ね。じゃ、訳詩の方を聞いわ。

犬輔：それでは、訳詩を示します。

『手に余る、ガンコガンコは(三声用のカノン)』 K.559  
 手に余る、ガンコガンコは。それと知り、たしなめよや。  
 知り、たし ガンコ、ガンコ、...、ガンコ なめよや。

ラテン語に肖って古風な表現を使いました。意味は「頑固な人は手に余るものだが、そうと分ったならば、嗜[たしな]めればよい。分かったなら頑固を嗜めればよい。」です。

鳥代：以前教授に教えていただいた訳詩は「分からない人の運。こいつを知りな、芽出るのが」だったですね。歌うと「分からない、人の ンコ、何時お尻舐め出るのが」になるというものでした<sup>注6</sup>。あれだと下品な歌詞という烙印が付きますね。

犬輔：僕のは、その点には注意して翻訳しているから心配御無用。

教授：それでは歌手の条件を聞こうかね。

犬輔：バイエルと同じです。「た」を「だ」と発音する癖のある歌手に歌ってもらいましょう。「手に余る、ガンコガンコは。それと尻出し、舐めよや。尻出し、ガンコガンコ...ガンコ、舐めよや」に聞こえます。意味は説明するまでもないですけど、「ガンコガンコは手に余る。それと尻を出して舐めなさい。尻を出しガンコガンコ...ガンコを舐めなさい」です。

教授：なるほど。「尻を出して舐めなさい」は原詩のドイツ語聴取時の意味と同じだね。「手に余るガンコガンコ」と「ガンコガンコ...を舐めなさい」はガンコに変な意味はないけれど、日本語の ンコには変なものが多いから、単語そのものの意味を詮索してしまう人もいるかも知れない。*Jonico* ですら気の回しすぎが起こったんだからね。

鳥代：私、 ンコしてみても訳詩が種明かしされたわ。

犬輔・教授：ええっ。何だって。吃驚[びっくり]させないでくださいよ。

鳥代：連呼してみても訳詩が種明かしされたって言ったのよ。*coglione* の複数形である原詩の *coglioni* は、訳詩を「ガンコー」と少し伸ばして連呼して聞こえてくる単語と全く同じ意味なのね。種明かしがこれだったのなら *jonico* の単語そのものは「疑似餌」ということになるわ。ジュピター交響曲第1楽章の「疑似再現部」の手法もそうだけれど、モーツァルトってフェイントが大好きなのね。それにしても私、犬輔さんの訳詩の出来栄を見直したわ。モーツァルトの場合はラテン語、ドイツ語、イタリア語間での類似をネタにしているのに、日本語の歌詞だったら全部日本語の中で説明できて、しかも歌ってしまうなんてモーツァルトが知ったらきっと羨ましがるでしょうね。(小さい声で)でも走句や脚韻の効果は日本語では到底無理ね...

教授：さあ、「尻を舐める」が下品でひどい言葉かどうか、このようなカノンは迷作かどうかだ。

犬輔：まず「尻を舐める」だけど、最近こう説明されることが多くなったようです。「本当に尻を舐めることを相手に要求しているわけではなく、1500年代以前からドイツに伝わる言い回しで、意味としては「消え失せろ」、「引っ込め」という感じの日本語に近い。悪魔に罵られたマルティン・ルターの言葉も悪魔相手に「消え失せろ」と口汚く言い返しただけであり、ゲーテの騎士物語ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン においても敵対者に対して「消え失せろ」と口汚く言い返す意味で用いられている<sup>注5</sup>」。口汚いだけで、下品でスカトロジックな表現だと指弾するようなものではないですよ。それに最後の落ちちはあからさまであれば下品ですけど、万人に分かるようになっていない点で下品を免れています。

鳥代：迷作かどうか起承転結を見てください。起：格言のようなラテン語が歌われる、承：ドイツ語の慣用句が徐々に炙り出される、転：2回繰り返されていた意味ありげの一語がしつこく連呼される、結：その一語の種明かしにより、もはや慣用句が慣用句としての機能を失い全体がドイツ語の下品な文章に成り下がってしまう、ということね。ちょっとした歌い方のさじ加減で曲の品格が保たれなくなってしまうのだということと、それに気が付かない聴き手もいるのだということの両方を揶揄しているのでしょうか。名作だわ。

犬輔：三重構造なんだ。やっぱり、ぼくの訳詩は到底モーツァルトの足元にも及ばないや。

『おー、君、とんまのパイエル(四声用のカノン)』へ長調 K559a

鳥代：次は O du eselhafter Peierl! K559a ね。

犬輔：まず原詩を紹介しよう。モーツァルト自身による異版があるからそれを右に併記するよ。

O du eselhafter Peierl!  
O du Peirrlischer Esel  
Du bist so faul  
als wie ein Gaul,  
Der weder Kopf noch Haxen hat.  
Mit dir ist gar nichts anzufangen;  
Ich seh dich noch am Galgen hangen.  
Du dummer Gaul,  
du bist so faul,  
du dummer Peierl bist  
so faul als wie ein Gaul.  
O lieber Freund, ich bitte dich,  
o leck mich doch geschwind im Arsch!  
Ach, lieber Freund, verzeihe mir,  
den Arsch petschier ich dir  
Peierl! Nepomuk! verzeihe mir!

O du eselhafter **Jakob! / Martin**  
O du **Jakobischer / Martinischer** Esel  
Du bist so faul  
als wie ein Gaul,  
Der weder Kopf noch Haxen hat.  
Mit dir ist gar nichts anzufangen;  
Ich seh dich noch am Galgen hangen.  
Du dummer **Paul**,  
**halt du nur's Maul**,  
**Ich scheiß dir aufs Maul**,  
**so hoff' ich wirst doch erwachen**.  
O lieber **Liperl**, ich bitte dich **recht schön**,  
o leck mich doch geschwind im Arsch!  
**O**, lieber Freund, verzeihe mir,  
den Arsch petschier ich dir.  
**Liperl! Jakob / Martin!** verzeihe mir!

鳥代：異版の方は『おー、君、とんまのマルティン/ヤーコブ(四声用のカノン)』ト長調 K560 ね。K559 と K.559a が作曲された後に K.559a を改訂して K.560 ができたんですね。

犬輔：既出のゴットフリート・ヴェーバーによる 1824 年の報告では「風変わりなラテン語の詞がパイエルの口から期待したとおりに滑稽に皆の耳を楽しませるやいなや、モーツァルトは五線紙を裏返して、拍手の代わりにカノンによる勝利の風刺の歌『おー、君、とんまのパイエル』を皆に歌わせたのだった」となっており、今日大英博物館にある自筆譜も K.559 と K.559a が表裏になっているようだ。

教授：ところが、事態は入り組んでいるんだ。よくお聞きなさいよ。モーツァルトの『全自作品目録』で K.559 と並んで記載されているのは『おー、君、とんまのマルティン』へ長調なんだ。さらに奇妙なのは五線紙研究のアラン・タイスンによれば K.559 及び K559a の作曲が 1787 年 12 月以降 1788 年 9 月 12 日以前なのに対し、K560 の作曲は 1783 年とされている。マルティン及びヤーコブを揶揄するために作曲してあったカノンを、パイエルをからかうために三度目の使い回しに及んだということになるね。そのときに歌詞を少し手直ししている。モーツァルトの修正のポイントを知ること重要だ。

鳥代：それでは犬輔さん。訳詩の出番よ。

犬輔：それではご披露いたしましょう。

『おー、君、とんまのパイエル(四声用のカノン)』へ長調 K559a  
おー、君、とんまのパイエル、おー、君、パイエルのとんま！  
頭も手足もきかぬ間抜け者。君では埒が明かない；  
首を括るがいい。駄目馬、ぐうたら、バカのパイエル馬のよう。  
おー、わが友よ、お願いだ、おー舐めろよこの尻を、舐めろはやくこの尻を。  
あー、わが友よ、許せ、[君に]尻、尻はしまおう。パイエル！ネポムク！許せよ！

鳥代：これが元はどのような歌詞だったのかしら。

犬輔：こんなふうになっていたんだ。

『おー、君、とんまのヤーコブ/マルティン(四声用のカノン)』ト長調 K560  
おー、君、とんまのヤーコブ/マルティン、おー、君、ヤーコブ/マルティンのとんま！  
頭も手足もきかぬ間抜け者。君では埒が明かない；  
首を括るがいい。文句言ったら、口に **ンコだ目を覚ませ**。  
おー、わがリーベルよ、お願いだ、おー舐めろよこの尻を、舐めろはやくこの尻を。  
**おー**、わが友よ、許せ、尻、尻はしまおう。**リーベル！ヤーコブ/マルティン！**許せよ！

教授：ヤーコブ/マルティンの揶揄には恐らく必要であった「口に **ンコだ目を覚ませ**」(「クソ喰らえ」)がカットされたことが最大の変更だ。元の歌詞はその部分で Maul 同士が脚韻を踏んでいるため稚拙で、起承転結の承も据わりが悪かったが、カットされることで形式的にもすっきりした。パイエルに対してはこれでぴったりの歌詞になったと言えるだろう。K.559 の慣用句が過不足なく意図的に下品な文章に成り下がって使われているからね。

鳥代：パイエルは宮廷のバリトン歌手であったばかりでなく、ヴァイオリンも専門とし、俳優で

もあったのね<sup>注7</sup>。レーオポルトの手紙によれば1785年12月中旬までザルツブルクにおり、その後1787年までウィーンに滞在している。一方、マルティン/ヤーコブはアインシュタインによれば、フィリップ・ヤーコブ・マルティンのことでメールグラーベやアウガルテンにおけるコンサートの支配人であったとのこと。ただしリーペルは不明のままよ。

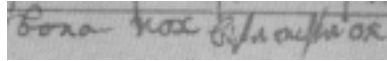
### 『ボナ・ノクス！ お前もグズ（四声用のカノン）』 K561

鳥代：次は Bona nox! Bist a recha Ox K.561 ね。

教授：この曲は NMA 出版時に自筆譜を参照できなかった関係上、歌詞に問題がある。その後自筆譜が再発見されて AMA の歌詞のほうが正しかったという顛末があるんだ。

NMA の歌詞の 1 行目は『全自作品目録』の表記に従っている。

Bona nox! Bist a recha Ox;  
 Bona notte, liebe Lotte;  
 Bonne nuit, pfui, pfui;  
 Good night, good night, heut müßma noch weit;  
 gute Nacht, gute Nacht, schieß ins Bett, daß' kracht;  
 gute Nacht, schlaf fei g'sund und reck' den Arsch zum Mund.



しかし自筆譜の 1 行目の表記は“ Bona nox! Bist a recha Ochs; ”となっている(=AMA)。標準ドイツ語で表記(イタリア語も修正)すればおそらく全体は以下ようになる。

Bona nox! Bist auch recha Ochs;  
 Buona notte, liebe Lotte;  
 Bonne nuit, pfui, pfui;  
 Good night, good night, heut müß wir noch weit;  
 gute Nacht, gute Nacht, schieß ins Bett, daß es kracht;  
 gute Nacht, schlaf fein gesund und recke den Arsch zum Mund.

「お休み」の挨拶が順にラテン語、イタリア語、フランス語、英語、ドイツ語で発せられ、それらに応じた押韻が続いている。直訳すると“ Bist auch recha Ochs お前も全くのろまの雄牛だ ”、“ liebe Lotte 愛するロッテ ”となり、ここまでが両親から男の子と女の子への呼びかけで起に相当、“ pfui, pfui チェッ、チェッ ”、“ heut müß wir noch weit 今日私たちもっと遠くへ行かなくちゃ ”が子供たち揃っての受け答えで承に相当する。“ schieß ins Bett, daß' kracht ベッドで脱糞しなさい、大きな音を立てて ”が再び両親の言葉で転、“ schlaf fein gesund und recke den Arsch zum Mund ぐっすり眠れ、そしてお尻を口まで伸ばして ”が結だ。この原詩こそ下品ではないかという誇[そし]りをどうかわすかね。

犬輔：このカノンは「ドリフのピバノン音頭」の前振り「歯磨いたか」「風邪ひくなよ」「お風呂入れよ」を子供たちに向けたと考えればいいのではないのでしょうか。そこに「トイレを済ませるよ」という一句があってもおかしくないですよ。オマル Nachtgeschirr を使って「ベッドで音を立てて脱糞しろよ schieß ins Bett, daß' kracht」ということでしょう。NMA 序文ではザルツブルクにおける脚韻を踏んだ慣用句“ Scheiß ins Bett, daß's übergeht, morgen ist Elisabeth (ベッドで溢れるくらい脱糞しなさい、明日の朝はわが神がわれを支えてくださる)”というのを紹介しています<sup>注9</sup>。子供のおねしょや大人の夜半(早朝)覚醒を防止する“ 転ばぬ先の杖 ”といったような言い回しでしょう。モーツァルト時代にはもうトイレが使われていたけど<sup>注8</sup>慣用句として残っていたんですね。

鳥代：その次は『おしりかじり虫』の出番ね<sup>注10</sup>。“ ぐっすり眠れ、そしてお尻を口まで伸ばして schlaf fein gesund und recke den Arsch zum Mund ”って猫のように身体を丸くして眠りに就くことを言っていると思うけれど、このフレーズも慣用句だった可能性が高いわ。何故なら、モーツァルトの母親から夫宛の1777年9月26日の手紙の最後に“ adio ben mio **leb gesund, Reck den arsch zum mund.** Ich wünsch ein guete nacht, **scheiss ins beth das Kracht** ”と書いてあり、さっきのフレーズと一緒に出てきているんですもの。

犬輔：モーツァルトはザルツブルク近郊生まれの母親から慣用句を受け継いだんだね<sup>注11</sup>。レーオポルトも1778年6月29日の妻と息子宛の手紙で“ ich und die Nannerl ... küssen und lecken, aber nicht im A--- ”と言っているけど母親ほどではないし。別の人にはモーツァルトが1777年11月5日付のアウクスブルクのベースレ宛の手紙で“ ietzt wünsch ich eine gute nacht, **scheissen sie ins beet daß es kracht; Schlafens gesund, reckens den arsch zum mund** ”と書いているのを指して「ベースレ書簡は1777年、この歌は1788年である。モーツァルトは11年も同じ表現を堅持していることになる。雀は百まで踊りを忘れぬとやら。よくよくモーツァルトはこの文句が好きだったにちがいない。いやはや<sup>注12</sup>。」と言うんですが、慣用句であれば年齢を問わず誰もが何回も使いますよね。

教授：いや、アウクスブルクやウィーンでザルツブルクの慣用句がそのまま通じたとは限らない。一説に「[二つの句は]カノンに使われており、ウィーンでも、人々が一般に使っていた表現であることを証している<sup>注13</sup>」とあるのは別の根拠による再検証が必要だね。

鳥代：そうよ。このカノンのキーワードは“ローカルな慣用句”なんだわ。国ローカルな挨拶は他国でも通じるけれど、地方ローカルな慣用句（ザルツブルクの慣用句）は隣の地方（ウィーン）ですら通じないとウィーン方言で歌っているのね。歌ったあと、きっとモーツァルトは仲間に慣用句の意味を種明かししたのよ。

犬輔：訳詩は種明かし後の歌詞とし、立ち位置を示す方言は割愛、鳥代さんが無理だと言った脚韻を取り入れました。ぼくには“heut muß wir noch weit”もザルツブルクの慣用句であるように思われますので、それらしく訳しました。

『ボナ・ノクス！ お前もグズ（四声用のカノン）』 K561  
 ボナ・ノクス！ お前もグズ；  
 ボナ・ノッテ、ほらロッテ；  
 ボン・ヌイ、はい、はい；  
 グン・ナイト、グン・ナイト、“いい夢みないと”；  
 グテ・ナハト、グテ・ナハト、“ベッドでスカッと”；  
 グテ・ナハト、“おしりかじってぐっすり眠れ”。

### 3曲の L. m. i. a カノン『俺の尻を舐めろ』

教授：最後に1799年にコンスタンツェが出版社のB&Hに送った手紙の中で言及した“3曲のL. m. i. aカノン”の同定である。これに関してはMJb 1991にマイケル・オクスが発表した論文を紹介しよう<sup>注14</sup>。彼はカノン『おれの尻を舐めろ』K.231 (382c)、カノン『おれの尻を舐めろ、きれいにきれいにね』K.233 (382d)、カノン『夏の暑さにおれは喰う』K.234 (382e) がそれであろうと推定している。これらにはモーツァルトの自筆譜が存在せず、B&H社の手書きカタログに曲首の歌詞が順に“Leck mich im Arsch”、“Leck mir den Arsch fein recht schön sauber”、“Bei der Hitz im Sommer eß ich”と書かれているものの、出版されたときには“無難な歌詞”に変えられてしまっていた。ところが、ハーヴァード大学エリック・オッフエンバッハー・モーツァルト図書館の蔵書である『モーツァルト全集(Euvres Completes)』（1804年、B&H社）には、印刷された無難な歌詞の下に手書きのペンで上記カタログ記載の歌詞が全文書かれているのを発見したというんだ。この一冊は元B&H社内保管図書であったのでこのような記入ができたということらしい。

鳥代：でも、K.233とK.234はヴォルフガング・プラートによればペスト大学の医学教授でありアマチュア作曲家でもあったヴェンツェル・トゥルンカ（1739-1791）の曲であろうということだったわね<sup>注15</sup>。作曲家ヴェンツェル・ヨハン・トゥルンカ（1782-1849以後）は別人だから注意が必要よ。ドロシア・リンクも取り違えているわ<sup>注16</sup>。

教授：つまり、メタスタジオ作のイタリア語の歌詞を持ったトゥルンカのカノンを筆写した人物、及び歌詞を作詞しなおした人物がモーツァルトなのかどうか問われるわけだ。NMA校訂報告ではK.231もトゥルンカの未確認カノンの筆写ではないかと述べている。

犬輔：コンスタンツェはモーツァルトの筆跡を知っていたのだから、少なくとも音符が歌詞のいづれかがモーツァルトの筆跡だった可能性は高いですね。

教授：では1曲ずつ新発見の歌詞を披露するから訳詩を頼んだよ。まず、K.231だ。

Leck mich im Arsch g'schwindi, g'schwindi! Leck mich im Arsch g'schwindi. Leck mich, leck mich [leck mich, leck mich, leck mich] leck mich, [leck mich,] leck g'schwindi, [g'schwindi, g'schwindi], g'schwindi! g'schwindi, [g'schwindi, g'schwindi,] g'schwindi! Leck mich im Arsch g'schwindi, [g'schwindi, g'schwindi,] g'schwindi! g'schwindi [g'schwindi, g'schwindi,] g'schwindi! (カッコはリピート部分を展開して示してある)

犬輔：“g'schwind（速く）”が異様に多いですね。圧倒されます。しかも、すべての語尾に-iが付いていますよ。指小辞でしょうか。名詞ではないのにおかしいですね。

鳥代：気をつけて訳してね。だって、ここは全部連呼することになるんでしょ。

犬輔：連呼？ …そうか！g'schwindiの-iは連呼することでschwindigを浮かび上がらせるための細工なんだ！つまり、Schwindは動詞schwinden“消え失せる”の語幹を名詞とした“消え失せること”であり、schwindigはその形容詞化で“消え失せた”となる。なるほど、「おれの尻を舐めろ」は「消え失せる」と同義語であることを説明するカノンなんだ。

鳥代：でもg'schwindiは何と読むのかしら。視覚的ではなく音楽的な説明が欲しいわ。

教授：おそらくアポストロフィの部分はウィーン方言でeの音が抜けることを表しているのではないか。ウィーンのクリスマスソングに“Stacherl, sollst g'schwind aufstehn（シュタツハちゃん、すぐに起きなさい）”というのがあるし、K.556のG'rechtelnもウィーン（バイエルン）の方言だったね<sup>注17</sup>。オーストリアでは語頭のgとkの発音が区別できないことがあるからg'schwindiを“クシュヴィンディ”とも発音するであろう。すると連呼で“シュヴィンディクschwindig”となるね。オーストリアでは-igの発音が“イク”なんだ。

犬輔：いずれにせよ、訳詩をつけてみます。ちゃんと歌える歌詞ではないんですけど。

『俺の尻を舐めろ、いいな！（六声用のカノン）』K.231 (382c)  
 俺の尻を舐めろ、いいな、いいな！俺の尻を舐めろ、いいな。俺を舐めろ、俺を舐めろ、俺を舐めろ、俺を舐めろ、俺を舐めろ、俺を舐めろ、舐めろ、いいな、いいな、いいな、いいな、いいな、いいな！俺の尻を舐めろ、いいな、いいな、いいな、いいな、いいな、いいな、いいな、いいな、いいな、いいな、いいな！

仮にこの歌詞で歌うと、“いいな”を連呼しているうちに“いない”に聞こえてきて、“消え失せる、いいな”が“消え失せる、いない”になっていくという仕掛けなんですけど、訳詩の全文を展開すると“いない”が15回も、しかも六声で連呼されて、しつこいばかりです。原詩も同様で、策士策におぼれたような歌詞でモーツァルトらしくないですね。

教授：では、口直しにK.233の新発見の歌詞に行こうか。

Leck mir den Arsch recht schön, fein sauber lecke ihn, fein sauber lecke [,] leck mir den Arsch. Das ist ein fettigs Begehren, nur gut mit Butter geschmiert, denn das Lecken der Braten mein tägliches Thun. Drei lecken mehr als Zweie [,] nur her [,] machet die Prob' und leckt, leckt, leckt. Jeder leckt sein Arsch für sich.

犬輔：はい。ちょっとおどけて訳してみましよう。

『舐めろよ俺の尻うまく（三声用のカノン）』K.233 (382d)  
 舐めろよ俺の尻うまく、舐めろ綺麗サッパリと、舐めろや舐めろ俺の尻。  
 毎日ロースト舐めまくり、ギタギタバターでご満悦。  
 二人、三人舐めるがよい。ここでだ、皆さん、お試しあれ。舐め、舐め、舐め、自分のため。誰もが誰かの尻舐める。

調子がいいでしょう。まるでモーツァルトが母親やベースレに宛てた手紙のフレーズだ。

教授：ここで知っておかなくてはならないのはモーツァルトはプライベートな行為とパブリックな行為を厳密に区別していた音楽家だということだ。家族に手紙を書くことはプライベートな行為であった。作曲は一般にパブリックな行為であるが、K.441やK.571aなどのように演奏者が身内に特定されている、（出版されないようにわざと？）未完成のものしか残されていないものはプライベートな行為であった。その点、カノンも仲間内で歌うために作られたのだから作曲当初はプライベートな行為だった。だが、そのうちの何曲かはパブリックに使える曲（批判に耐える作品、あるいは一人歩きできる作品）であることにモーツァルト自身のちに気が付いた。作曲後数年経った1788年に『全自作品目録』にK.553～K.562の10曲が纏めて登録されたということを諸君らも知っているね。だからモーツァルトの自信作のカノンだ。一方、プライベートからパブリックに格上げする選に漏れたカノンは使用後意図的に廃棄されてしまったと考えてもいいのではないか。カノンのスケッチが多く残されていることから完成されたカノンも沢山あったものと思われるからね。スケッチの方は複数曲が同居しているから個別廃棄は困難だ。

犬輔：ということはK.233はモーツァルトのプライベートな手紙同様の歌詞で、どう見てもモーツァルトの作詞でしかありえないから、使い捨て目的に使われた楽譜がたまたまコンスタンツェの手元に残ってしまっていたという可能性を追求すべきだということですね。オリジナルが自作の曲ではないため捨て損なったということもあるのかもしれない。

鳥代：K.231の方も、geschwindという単語がK.559aやK.560にも出てくるし、連呼の効果がK.559で使われたり、ヴィーン方言も特徴となっていることからモーツァルトが作詞した可能性は充分にあるでしょうね。やはりこちらも習作として作詞したものがたまたま残ってしまったのでしょうか。起承転結もなく作品と認めるには随分不出来な歌詞ですものね。

教授：残りのK.234はどうするかね。新発見の歌詞を示すよ。

Bei der Hitz im Sommer eß ich gerne Wurzl und Kräuter auch Butter und Rettig; treibt fürtrefflich Wind und kühlet mich ab, und kühlet mich ab. Ich nehm Limonade, Mandelmilch, auch zu Zeiten Horner Bier [,] auch zu Zeiten Horner Bier; das im heißen Somer [!] nur, im Sommer nur. Ich für mich in Eis gekühlts Glas Wein, für mich in Eis gekühlts Glas Wein in Eis. Auch mein Glas gefrohrenes.

犬輔：無難すぎて拍子抜けします。

教授：そうだね。コンスタンツェの1799年8月13日の手紙によれば、送り込んだカノンの楽譜は重複し混乱していたというから、K.234は歌詞が複数あったもののうち、無難な歌詞の方だけ残り、『おれの尻を舐めろ』の歌詞の方は紛失してしまったのかもしれないね。

## まとめ

教授：20世紀後半にはモーツァルトのカノンをスカトロロジーの産物に仕立て上げたい人たちが

内外に多くいたということだ。モーツァルト・ファンもそれに引きずられてきたきらいがある。21世紀のわれわれはそういった欲求に囚われたり、ブレたりしないためにもしっかりとしたカノンの聴き方をしなければいけない。ここで聴き方をまとめておこう。

カノンは四コマ漫画だ。短い歌詞の中に効率よく多くの情報を盛り込む手法が使われている。楽譜を渡された仲間たちは歌詞の意味を考える必要があった。テーマはすぐにでも分かったであろうが、モーツァルトの仕組んだ細工はすぐには分からなかったものと思われる。曲によっては歌い終わってから、極端な場合は家に帰ってから分かるものもあったに違いない。その細工に使われた作詞の手法は主に以下のようなものであることは既に見てきたとおりだ。(1) 成り代わり、(2) 言い直し、(3) 方言の使用、(4) 慣用句、(5) 動詞の名詞化、(6) 時の逆行、(7) 二重・三重の意味、(8) フェイント、(9) 種明かし・落ち。

鳥代：これらの手法の多くは修辞法ですね。修辞法の理解は規則を探すことから始まるってよく言われるわ。例えばオペラなどで歌詞に使われる“おお、星たちよ”は“おお、運命よ”のこと、“わが偶像よ”は“いとしい人よ”のことで隠喩表現よ。これは知らなくても自分が困るだけで、まあ恥ではないわ。でも一見下品な言葉だと見ると、妄想たくましく増幅し、決定的に下品な結論を出して世に問うのは感性の問題ゆえ恥ずかしいことになるわ。規則が必ずあるからそれを捜すことよ。慣用句(婉曲表現も含む)もその一つだったわね。

犬輔：『全自作品目録』からはモーツァルト自身の作品に対する冷静な目を如実に感じることもできるんだね。後世に作品を残そうとしていたのかどうかは別として、曲以外からのモーツァルトによるメッセージも貴重なんだ。2回に亘ってカノンの歌詞を分析して、ぼくはコンスタンツェにはないモーツァルトの矜持[きょうじ]というものを強く感じました。

注1：Gottfried Weber: "Originalhandschrift von Mozart", Caecilia 1 (1824):179-182.

注2：植村耕三『12のカノン』LP [ ARCHIV LAM-94 ]

注3：属啓成 [ ユカケイ ] 『モーツァルトのカノン げすな一語がわかるまで』1975年8月21日 朝日新聞夕刊。

注4：Emanuel Winternitz: "Gnagflow Trazom: An Essay on Mozart's Script, Pastimes, and Nonsense Letters." Journal of the American Musicological Society 9 (1958) pp.200-216.

注5：俺の尻をなめる - Wikipedia

注6：野口秀夫『モーツァルトのペット談義』< http://sound.jp/mso/jp/pet.html >

注7：Bayerisches Musiker-Lexikon Online < http://www.bmlo.lmu.de/p0297 >

注8：1791年7月12日付ウィーンからの手紙の“Schieshäusel (便所小屋)”，1777年10月25日付アウクスブルクからの heisel、1777年12月3日付マンハイムからの Häusel など、モーツァルトは便所小屋を使っていた。邦訳書簡全集 第III巻 318頁では“小部屋(おトイレ)”と訳しているので紛らわしいが、屋外の小屋である。

注9：エリーザベトの名は旧約聖書に既に出ており、ヘブライ語による意味は“わが神はわが支え”である。

注10：「おしりかじり虫」は、NHKの『みんなのうた』で2007年から放送されている、うるまのびの楽曲。

注11：例えば豊田泰著『モーツァルト：その天才、手紙、妻、死』p.49 文芸社 2002年。

注12：石井宏解説『モーツァルト：声楽のためのカノンと重唱』LP [ ANGEL AA-8424 ]

注13：カローラ・ベルモンテ著/海老沢敏・栗原雪代訳『モーツァルトと女性』275頁 注23 音楽之友社 1974年

注14：Michael Ochs: "L. m. i. a". Mozart's Suppressed Canon Texts, in: MJB 1991.

注15：Wolfgang Plath: "Wenzel Trnka und die angeblichen Mozart-Kanons KV 233 (382d) und KV 234 (382e)". In Opera incerta. Kolloquium Mainz 1988, pp. 237-58.

注16：Dorothea Link: È la fede degli amanti and Viennese operatic canon, in Simon Keefe, ed., Mozart Studies. Cambridge: Cambridge University Press, 2006.

注17：1791年10月8日付手紙によれば、モーツァルトにとってバイエルン風とウィーン風とは異なるものだったが。

付録：歌える訳詩によるカノン(原詩で歌ってから、改めて訳詩で歌うことを薦める)

「手に余る、ガンコガンコは(三声用カノン)」K.559

1.  
Dif - fi - ci - le, le - ctu a - hi mars et jo - ni - cu, jo - ni -  
てに あ まる、 がん こ が ん ころほ、 そ れ と しり た

2.  
cu dif - fi - ci - le, le - ctu le - ctu le - ctu, co - co a - hi mars, a -  
し の め や、 それ と しり た し な こ こ め や、

3.  
co - hi mars le - ctu le - ctu dif - fi - ci - le, le - ctu le - ctu, jo - ni - cu jo - ni - cu  
これと しりた し の め や、 しりたし、 が ん こ が ん こ

jo - ni - cu jo - ni - cu jo - ni - cu jo - ni - cu jo - ni - cu jo - ni - cu jo - ni - cu dif - fi - ci - le,  
が ん こ が ん こ が ん こ が ん こ が ん こ が ん こ が ん こ が ん こ、 が ん こ、 の め や

「おお君、とんまのバイエル（四声用カノン）」K.559a

1.

o du e - sel - haf - ler Pei - er! o du Peir - li - scher E - sel! du bist so  
 おー きみとんまの バイエル! おー きみバイエルの とんま! あたま

2.

faul als wie ein Gaul. der vorder kopf noch he - xen hat. Mit dir ist gar nichts an - zu - fan - gen!  
 も てあし も きかめ まめけも の。きみではらちが あかぬい:

ich seh dich noch an Gal - gen han - gen. du dum - mer Gaul. du bist so faul.  
 くびきくくるが いい だめうま! ぐうたら、

3.

du dum - mer Pei - er! bist so faul als wie ein Gaul. o lie - ber Freund, ich bit - te --  
 ばかのバイエル うまのよ。 おーわがとちよおねがい

dich. o leck mich doch ge - scheind is -- arsch! o leck --. o leck --. o leck mich doch ge -  
 だ、 おーなめろよ このけつぎなめろ --、なめろ --、なめろほやく

4.

schand, ge - scheind is arsch. Ach, lie - ber Freund, ver - zeih - he mir, den arsch, den arsch peit -  
 このけつぎ。 あーわがとちよゆるせ、 けつ、 けつは

schieß ich dir, Pei - er! No - po - muk! Pei - er! ver - zeih - he mir!  
 し まおう、バイエル! ネ ポムク! バイエル! ゆるせよ!

「ボナ・ノックス! お前もグズ（四声用カノン）」K.561

1.

Bo - na nox! bist a rech - ler Gsch; bo - na  
 ボ ナ ノクス! お ま え も グズ; ボ ナ

2.

not - te, lie - be Lot - te; bonne nuit, pfui, pfui: good night, good  
 ノッ テ、 は ら ロッ テ; ボンヌ ナイト、 はい、 はい; グ ナイト、 グ

3.

night, heut wuess - sa noch weit; gu - te Nacht, gu - te Nacht, schneiss ins Bett, dass  
 ナイト、 "いいゆめ みな いと"; グ テ ナイト、 グ テ ナイト、 "ベッ ド" で

4.

kracht; gu - te Nacht, geschief fel s'und und reck' den arsch zum Mund.  
 スカット; グ テ ナイト、 おしりか すんじつて ぐっすりねむれ。

(2011年11月1日作成、2011年12月26日改訂)